

## 「縫う女性」の表象

### —『ゴードイズ・レディズ・ブック』を手がかりに—

平芳裕子（神戸大学）

本発表は、19世紀アメリカの代表的女性誌である『ゴードイズ・レディズ・ブック』を主たる対象として、同誌の1850年前後の時代の特集記事に頻繁に掲載された女性像、「縫う女性」の諸特徴と歴史的展開、その文化的意味を考察するものである。

『ゴードイズ・レディズ・ブック』は1830年にフィラデルフィアにおいて、出版者ルイス・ゴードイにより『レディズ・ブック』の名で創刊された女性誌である。ヨーロッパの流行のスタイルや上流階級の作法を積極的にテーマに取り上げ人気を博したが、1840年代後半、突如として骸骨姿のお針子像が掲載される。以来、質素な身なりで繕い物をする女性の姿や、過酷な労働に疲弊したお針子の姿が頻繁に掲載されるが、1850年代前半には姿を消す。「縫う女性」は何故登場し、五年余りに渡って頻繁に描かれたのだろうか。

1840年代とは、織機の改良と紡績機の発明を経て、布地は大量に生産されるがミシンの実用化には至らぬ時代であり、ヨーロッパではお針子の過酷な労働が社会問題として顕在化した時代である。産業革命をいち早く迎えたイギリスのメディアにおけるお針子像については先行研究も多数存在し、発表者も既発表論文でその経緯を考察したが、同時代のアメリカのお針子に関しては統計資料も先行研究も数少ない。しかし『ゴードイズ・レディズ・ブック』という19世紀に継続的に出版された女性誌を通時的に見ることで、近代の衣服産業の発展に伴う女性像の変容の一側面を明らかにすることができると考えられる。

そこで同誌の1840年代後半から頻繁に掲載された「縫う女性」に着目するならば、それまで人目に触れることのなかった「裁縫」に新たな価値が付与されていくプロセスを見ることができる。同誌は「レディの趣味」としての装飾的な「刺繍」を取り上げても、同じ針仕事である実用的な「裁縫」を掲載したことはなかった。しかし国土の拡大と都市の発展に伴う読者数の増大と雑誌の大衆化を背景として、家庭で行われる「裁縫」、すなわち衣服の制作とそれに伴う内職が、ローウェルなどの織布工場での下層階級の労働と差別化される。「縫う女性」とは、産業革命による織布産業の発達により消えた「紡ぐ女性」や「織る女性」に替わる女性性の新たな象徴として機能する。ミシンや型紙の登場により衣服生産の全てが機械化されるとともに誌面から姿を消す「縫う女性」は、アメリカ社会における女性を巡る労働と家事の境界の揺らぎを示すと同時に、女性が「家庭」にどのように縫い込まれているかを視覚化しているのである。